

青髭 1 5

明宏訊

三人が陣取っているのは小高い丘であって、そこからはパリ、ヴェルサイユ、両軍の戦いを臨むことができる。ちなみに、前者がアンリ、後者がアンナと改めて決められた。

べつに海が近いわけでもないのに地平線に青みがかかっている。

ここが辺境にある証拠に、かなり天気がよくても町を見出すことはできない。眼下に収まるのは上部にひっそりと原野、中部から下部にかけて山々が横たわる。

木々の暴力的な縁に邪魔されて、かろうじて地平線が開けるくらいである。このような辺鄙な場所を知らない町暮らしうえに、アンリはなおさら鬱屈した気持ちが深まっていくのを感じた。

平民がいかに戦うのか、それをまじかに見せつけられて、用水の権利を巡ってという打差が相まっているのか、両軍の本気度は尋常ではないように思われた。もっとも、普段を知らないアンリは比較しようがないわけだが、たがが訓練でここまでやるのかと文句を垂れたくなるほどに負傷者が始めている。

「アンリ、どうした？ 戦は始まっているのだぞ？」

「……………？！」

主君の指摘を待つまでもなく、パリとヴェルサイユが戦闘状態に入っていることはわかっている。平民たちというものものが、剣や鎧といった不格好なもので武装しないと戦争のひとつもできないことを知った。

だが、主将や将軍、それに騎兵、歩兵、それらのうちにも生意氣にもヒエラルキーが存在すること、指示系統が成立していること、それらを伯爵の講釈によって知った。口に出すのも憚られるが、主君の頬に口づけをしたことによって受けた精神的なショックのしたでも、知的な部分は生き残っていて、なお、完全に耳に入るだけでなく、理解はしていた。

アンリとアンナは、指定された範囲内においてのみ魔法を使うことができる。いわば、生きた駒で行うチェスだ。平民たちは、山地、森、平地、湖沼、といった戦場にあるべきポイントがあたかもドールハウスのように小さな面積に取り込まれている。これが来るべき戦場の準備、といったところか。しかし、仮想敵はだれなのか、という問題が横たわっている。

今は、目の前の現象に注視すべきだろう。

主将は、互いに自軍の戦力を集中させる一方、相手の戦力を分散させるように励んでいる。これは伯爵が訓練させた結果なのだろうか、いや、主君が表立つことはないから、アンナの功績か、ならば、アンリに勝利する可能性はとても見いだせない。やるからには負けたくない、そういう性分が彼の中には少なからず存在する。

こういう状況下において使える魔法は、人の能力を支援する白魔法にすぎない。それゆえに、干渉しえる程度はたかが知れている。だが、そうするタイミングと力の強さの加減によって、小さな力が何万倍にもなりえる、それが雌雄を決するのだと、アンリは知った。平民たちを通じてアンナの力がひしひしと伝わってくる。

思わず、じかに力を発動する衝動に駆られる。ロペスピール家の血とまともにぶつかりあつたら、アンリはとても生きていられないだろう。いま、エウロペ世界に巣食おうとしているモラ

ルに反する、それ自体のせいでアンナであっても、いや、名だたる名門の血筋ゆえに住まう場所を失う。

それ以前に、いかなる理由で彼の名門の眷属がこんなところに住まいしているのか、それこそが論議されるべきことだろうと、思考の世界に逃げ込んでいるうちに、アンリが駒としているパリ軍が圧倒されつつある。アンナが操るヴェルサイユ軍は機械仕掛けの時計のような効率さで見事兵力を集中させ、かたちが崩されつつある。

「おい、パリが壊滅寸前だな。このままだと、かなり援助しないと彼らは一年を過ごせないかもしだれないな」

「…………」

この痩せた土地でどちらが敗者になろうとも、飢餓が待っている。そして、それを完全に助けるほどに伯爵家の財政が潤沢でないことをアンリは知っている。

自分が知りし召す土地にもかかわらず、主君はまるで他人事である。

こちらもふざけてやっているわけではない。

「ああ、これではあの者は持たんぞ、たしか、アラン・ギースとか言ったか、あの将軍だ」

初見から、伯爵が名指しした武将はアンリも買っていた。なぜか、攻撃力と統率力において他を抜きんでているように思えたからだ。彼にエネルギーを集中的に注入している。外見は小太りでさえないが、いざ、武器を持って馬に飛び乗ると遠地まで届くほどに戦意が迸っている。

じっさいの戦いようをみてもたった一騎で防壁の中心を担っている。それどころかなんとか戦線を立て直し、あわよくば、攻勢に出ようと何度も試みるほどだ。

だが、彼も限界が近づきつつあるようだ。剣のフリにも当初のような冴えが感じられなくなりつつある。だからといって、これ以上平民の脆弱な心身にエネルギーを注入すれば、伯爵が指摘するように彼の身体が持たないだろう。

はたから見ると自分たちはどう見えるのだろう？もっとも、平民たちの中でこちらを注視するほど余裕のある者はいるだろうか。

17歳の美少女が自分に向かって囁いているのである。

しかし、負傷した中にはあらぬ方向に意識を向ける者もいるかもしれない……彼らの視線を感じて怒りを覚えたアンリは、思わず注意をそらしてしまった。こちらに視線を向けた負傷者に対して殺気を送ったのだ。そのせいで思わず手振れが生じた。アランがとうてい耐えられないエネルギーを注入してしまったのだ。

「あ、しまった…」

時すでに遅く、アランは赤い血を吐きつつ馬上から転げ落ちた。複数の馬や人の足に踏まれてその後は見るも無残な肉塊に変り果てることが予想された。それはアンリが駒にするパリ軍の運命と同一だった。

アンリが駒とするパリ軍の攻撃の起点は常にアラン一騎が支配していた。それが打ち負かされる、いや、自爆てしまえばもはやなすすべがない。

「攻撃にしても、防御にしても中心とする将を幾人か用意しておくべきです」

久しぶりにアンナの声を聴いたような気がする。彫像のような口が動くとは外見からはなかなか予想できない。アンリは嘆息することしかできることがない。

「戦力を集中させればいい、というわけではないらしい」

アンリは不思議な気持ちで胸が覆い尽くされる気分を味わっていた。王都ナルボンヌで平民たちとさんざん関わっていたが、あの時とはまったく違う。アラン・ギースが爆死、文字通りの意味で真っ赤な血が迸り出たのであり、パリ方の平民たちはいったい、何が起きたのかと彼の周囲に集まっている、アンリの誤った魔術の制御によって悲惨な死を彼が迎えたとしても、有力であってもひとつの駒を奪われたにすぎない。チェスで言えば、兵士と女王の差くらいの程度であろうか、若い従子爵は王都において、平民たちをそのように扱ったことはなかった。もっとも、彼自身も平民というふれこみで彼らと接していたわけだが、あたかも友人であるかのように思えたこともある。

それがかつての主人であるブーリエンヌ女伯爵にその身分を最初から見抜かれていたことを知らされて以来、彼の中で何かが変わった。そして、父の後を襲って伯爵に使えるようになるとその感覚は日を追って強くなっていく。いま、それは決定的となりつつある。

ヴェルサイユ方の平民たちはここぞとばかりに戦意を失ったパリ軍の殲滅に移っている。

「これだから、彼らは凶暴……止めなさい…軍を納めなさい」

アンナの短い言葉とともにヴェルサイユ軍は司令官の元に集まつた。一斉にときの声を上げている。父親の書いた教科書はもちろんこと、バラ十字軍の経緯を詳述した文献にも合致する。あの時代いらい、平民を戦に持ち込むことはなぜか廃れていった。それを現在、何者か、見えない勢力が復活させようとしている。アンリの目にも、啓蒙主義者たちは彼らの手先ですらない、単なるピエロの一種にすぎないことくらいは読める。

アンナに能力で指示されて、彼らははじめて自分たちの残酷さに気付いたようだ。どれほど残酷な行為に手を染めていたのか、改めて手を見つめると赤い体液で汚れている。それは今まで、彼らの大勢は生活の中になかったことだろう。アンリは改めて同情したいきもちになった。

そんな彼に伯爵の声が囁いた。

「もう、気付いているだろう、お前の出番だ。これからすべきことがわかるはずだ、あたかも、水面に羊皮紙が浮かぶようにな」

なんということだろう。主君に指摘されてはじめて自分を取り戻すことができた。いや、表現をより正確にするならば、彼の中に父親が復活した。

「お前たち！パリも、ヴェルサイユも、よく戦った、殊勝ではある」

自分も驚くくらいの大声が迸り出てきた。父上…、おもわず、そう呟きそうになったが、口は別のことを言い出した。

「これから、この地の用水路の優先権は、諸君も知ての通りヴェルサイユが手にした…」

言うまでもないことだが、彼らは自分たちが駒にされていることを知らない。敗因がアンリにあ

ることなど想像だにできない。自分たちの意思で戦ったのだと固く信じて疑わない。ただ、どうしてここまで残酷になることができたのかと、すでに骸になった敵方の兵士たちを見つめながら、あるいはいどの自問自答に呻吟はしたが。

アンリは肅々と演説を続ける。

「しかし、権限はヴェルサイユ側に固定したわけではないぞ……」

どよめきを無視して、言葉の大剣をアンリはかざす。

「そんなばかな！あうう！」

そのとき、勇気ある平民が従子爵の言に叛意を示した。すなわち、立ち上がったのだ。しかし、すぐにその顔が細長い青年は大人たちによってひっこめられた。おそらくは親族なのだろうが、顔かたちがまったくといっていいほど似通っていない。地主と小作人という程度の関係性だろうか？

青年の頭を地面にぐいぐい押しつけるばかりではなく、自分の頭を痛いほどに額づいてアンリに許しを乞う。

「お、お、お許しください…ぶつ殺されてえも、文句もいえませぬが、これはガキであります……」

「よい、そのものが不満を漏らす理由もわかる。せっかく勝ったのにどうしてと、文句の一つも言いたくなるのが人情というものだ」

いったい、自分にこんな才能が潜在しているとはアンリは思えなかった。いくら相手が平民とはいえ、何十年も敬虔を積み重ねたうえで言葉を発しているようだ。言葉は抑揚のつけかたで内容とは必ずしも関係なく、相手に重みをもって受け取らせることが可能だが、いま、彼がやってることはまさに、それだった。たしかに、自分の中に父親を感じずにはいられない。

「私の言っていることの意味がわかるな、隙あらば、いつでもパリ側は攻め込んでくるのだ。どうすればいい、おい、そなた、名前は何という」

「ハイ…ギュスターブ・ペリゴールといいやす…」

「ならば、ギュスターブ、そちはどうしたらいいと思うか？」

わざわざ馬を近づける。王者のように見下ろす。青年は、アンリをあたかも慈父のように見つめる。自分にそんな価値があるのかと、苦笑するが、心のどこかに住まう父はたしかに確信に満ちて玉座に座っている。

「やはり、わしらが勝ったからには……」

青年はちらりとパリ側に視線を投げた。英雄、アラン・ギースの下にみなが集まっている。

「そなたはわかっていることと思うが？ただ、それを言葉にするだけだ」

「へい……」

少し考え込んでいたが、雷に打たれたかのように括目すると再び口を開いた。

「パリにも水を分け与えやす…」

今度は勝利したヴェルサイユ側にどよめきがあがったが、アンリが手を擧げるとすぐに収まつた。

「お前たちが勝利したにもかかわらずか？」

「4：3の割合で…」

「ほう、その根拠は？」

アンリは意外そうな顔をした。平民の知性というのも侮れないと思ったのだ。

「わしらはそのぐらい勝ちやした…」

「それとこちら側から付け加えたい。ある一定の期間を経て、戦いを再開する。それでパリ側にも文句はないな」

自分の采配の悪さが原因だったので、耳かき一杯分程度の罪悪感を飲み込んだ。どうやら両者が納得したようだ。それならばと、主君の方向へと馬首をめぐらしたところ、青年の声が聞こえた。

「か、閣下…じ、自分をあなたさまに捧げます…なんでも使ってください！」

それはこの地方の表現で召し抱えてほしいというほどの意味である。青年の瞳をみると、いかに自分に心酔しているかが見て取れた。

「それは…な…」

結界のために平民は城の中に入れないからだ。しかし、主君の表情は了としていたので、なぜか許可してしまった。

「わかった。ギュスターブ・ペリゴール、ついてまいれ」

さきほど、ギュスターブの頭を地面に額づかせた親族が、まったく反対することがなかった、そのことが何かひっかかったが、青年に同行を許した。